（書式２）

＜事務局使用欄＞**受付番号：**　　－

「２０２４年度タイ・チュラーロンコーン大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学教育学部４年　上嶋　美紀

私は「知らない世界を見てみたい」という漠然とした動機で本プログラムへの参加を志望しました。そのため、タイに関する事前知識はほとんどなく、それに加えて他言語学習に苦手意識を持っていたことから、渡航前は特にタイ語の習得に対して大きな不安を抱いていました。

しかし振り返ってみると、充実したサポートのおかげで非常に有意義な時間を過ごせたと感じています。京大にいる間は、チュラ大からの留学生がタイ語や現地で役立つ情報をしっかりと教えてくれました。事前学習では文法ではなく、タイ語での日常会話や注文の仕方などを学びます。例えば、タイの料理は辛いものが多いので、注文の際に「mai phet（辛くしないでください）」と言う必要がありました。このように、事前に学んだことを現地で実践できたときは、とても感動しました。

渡航後も、チュラ大の日本語専攻生が様々な場所に連れて行ってくれたり、生活のサポートをしてくれたりしたため、大きな不便を感じることはほとんどありませんでした。留学の終盤には、拙く限られた語彙ながらも、何とか最低限のコミュニケーションを取ることができるまでに成長し、買い物や食事を自分たちだけで行えるようになりました。

現地での授業は、ほぼすべて英語で行われます。最初は英語でタイ語やタイの文化を学ぶことに負担を感じていましたが、次第に慣れ、理解しやすくなっていきました。その結果、タイ語だけでなく英語の能力も向上したように感じています。

一方で、観光地や大学以外の場所では英語が全く通じないことも少なくありません。「英語は世界共通語」という認識を持っていた私は、簡単な英単語さえも通用しない現実に衝撃と困惑を覚えました。また、これまでの信念を覆された場面は他にもあります。授業でタイの伝統打楽器を体験した際には、音階やスティックの持ち方などが、私がこれまで日本で習得してきたものとは全く異なっており、大変驚きました。そして、アジアの国である日本でさえ、無意識のうちに欧米の様式をスタンダードであるかのように思い込んでいたことに気づかされました。しかし、言語や音楽のスタイル一つをとっても、それが全世界で当たり前というわけではありません。今まで当然だと思い込んでいたことも、場所を変えれば多様に存在するスタイルの一部に過ぎないということを改めて実感しました。

留学後半には、京大とチュラ大の生徒による共同発表がありました。私たちの班は両国の「おまじない」について比較しました。日本では当たり前とされていることがタイではそうではなかったり、反対に仏教や中国由来の文化には共通点が見られたりと、非常に興味深い発見がありました。辞書的な意味を調べるだけでなく、若者世代にそれらがどのように受け入れられているのか、またどのように変化しているのかについても考える機会となりました。

チュラ大の日本語専攻生の方々には、感謝してもしきれないほどお世話になりました。短い期間でしたが、たくさん遊び、たくさん話し、とても楽しく濃い時間を過ごすことができました。様々な場所に連れて行ってくれたことに加え、訪れた先々で大学生活や将来のことなどについて語り合い、これまで全く接点のなかった異なる国の大学生でありながらも、別れが惜しくなるほど仲良くなることができました。彼らが今度来日した際には、私たちが日本を案内したいと思います。

私は来年度から大学院へ進学します。今までは英語も第二外国語も苦手だと感じていましたが、いざその言語が飛び交う環境に身を置いてみれば、意外となんとかなるのかもしれないと思うようになりました。楽観的すぎるかもしれませんが、積極的に様々な経験を得るためにはこれくらいのチャレンジ精神も重要だと感じています。今後もさらなる海外渡航に挑戦し、幅広い視野を身につけていきたいです。